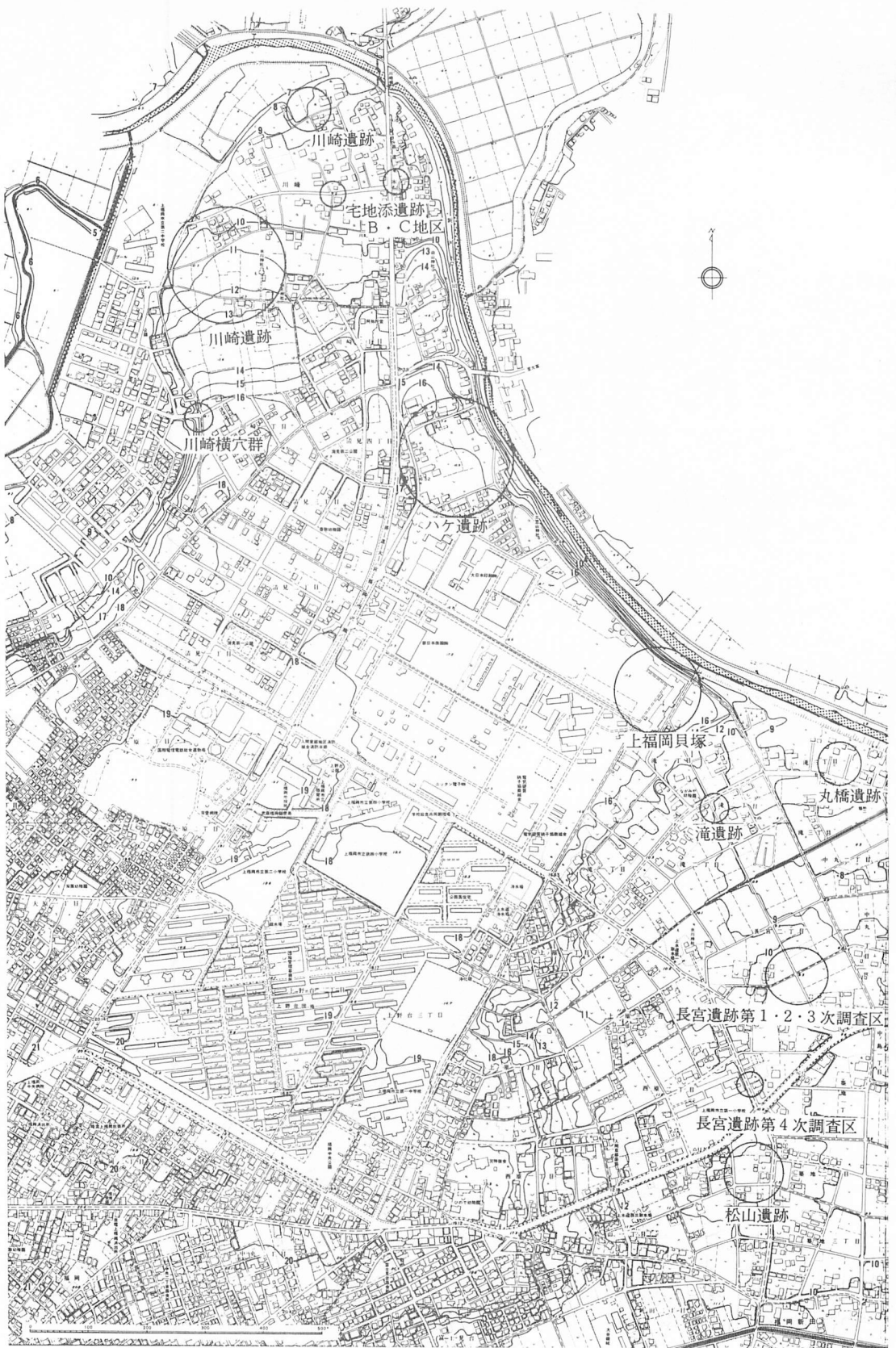




第2図 遺跡位置図(2)

I 発掘調査に至る経過

上福岡市には、約35ヶ所にも及び多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されている。一方、当市は、東京30分圏内という位置的条件から、東京のベッドタウンとしての様相を呈し、人口流入が激しく、宅地開発が盛んに行なわれている。市教育委員会では、昭和49年度より規模の大小問わずの開発に伴う、埋蔵文化財の破壊に対処するため事前に記録保存のための発掘調査を実施している。

本調査報告書は、昭和53年度に実施された小規模開発で埋蔵文化財包蔵地に該当し、遺跡に影響を及ぼすと認められる開発行為に先立って行なわれた10ヶ所の発掘調査報告書である。遺跡名、遺跡所在地、原因者名、調査面積、調査期間は、下表のとおりである。

	遺 跡 名	所 在 地	原 因 者	面 積	調 査 期 間
1	長宮遺跡第2次	上福岡市長宮2-1-27	近藤昭雄氏	235m ²	4月25日～5月15日
2	宅地添遺跡B地区	〃 川崎198	木村利夫氏	170m ²	5月15日～5月25日
3	宅地添遺跡C地区	〃 川崎230	沢田茂氏	130m ²	5月23日～5月31日
4	長宮遺跡第3次	〃 長宮2-5-11	堀井孝次氏	111m ²	7月24日～7月30日
5	丸橋遺跡第2次	〃 滝 3-3-13	内田郁男氏	210m ²	7月26日～8月6日
6	ハケ遺跡B地区第1地点	〃 中福岡1228-40	風間治男氏	165m ²	8月28日～9月10日
7	ハケ遺跡B地区第2地点	〃 〃 1181-2	吉野静氏	360m ²	9月11日～9月25日
8	滝 遺跡	〃 滝 2-6-11	西田アヤ氏	129m ²	10月2日～10月13日
9	長宮遺跡第4次	〃 長宮1-1-14	矢島重男氏	37m ²	10月6日～10月9日
10	松山遺跡	〃 松山2-5-4	宮寺三代松氏	479m ²	10月14日～11月6日

この調査に至る経過は、庁内の関係課との連絡調整、農業委員会事務局から農地転用許可申請段階、また建設部都市建設課から開発事前協議、建築確認等の申請段階でそれぞれチェックされ、教育委員会に通知され、教育委員会は、再度、遺跡地図と照合のうえ、現地調査を実施し、遺跡の状況を確認したうえ、遺跡に影響を及ぼすとみなされる工事主体者（原因者）に連絡し、協議を行ない、その結果、教育委員会が記録保存のための発掘調査を工事主体者（原因者）から依頼され、教育委員会が発掘調査主体者となって調査を実施することになったのである。

このうち、個人による個人住宅6件（新築5件、増築1件）、貸家建設2件、倉庫建設2件であった。

（高本文夫）

II 上福岡市の遺跡の立地と環境

埼玉県上福岡市は、荒川右岸の武蔵野台地縁辺部と荒川底地の水田面に位置している。台地縁辺には、荒川の支流である新河岸川が流れている。

荒川右岸の武蔵野台地縁辺部には、白子川、柳瀬川、黒目川等の河川が開析していて多数の遺跡が知られ、打越貝塚や上福岡貝塚等の考古学上著名な遺跡が多い。

市内の遺跡は、川崎舌状台地（A面武蔵野段丘面）とそれよりも一段低い段丘面（B面立川段丘面）と水田面から成り立っている。戦前の調査では、川崎貝塚、上福岡貝塚が知られていたが、近年の開発に伴う調査等によって多数の遺跡が知られるようになった。A面には、川崎貝塚、川崎遺跡（松尾他 1975、1976、笹森他1978）川崎横穴群（小泉他 1972）、ハケ遺跡、宅地添遺跡などが調査され、縄文時代早期末～前期前半、中期後半、古



第4図 遺跡地形図(2)

Ⅶ 滝 遺 跡

1. 遺跡の立地と調査の経過

滝遺跡は、南側に向かって緩斜面をなし、東西に平坦な地形である。ここから約90m北側には著名な上福岡貝塚が位置している川崎の台地（武蔵野面）がある。この平坦な台地の北方向へ200m離れて、同じ古墳時代五領期の丸橋遺跡がある。小字名で分けて遺跡名を付けてあるが、その間に土器片が散布し、一続きの遺跡である可能性がある。近い将来、この遺跡間の調査の際にはどちらかの遺跡名に統一する必要性があらう。南西への遺跡の範囲はまだ確認されていない。しかし、丸橋遺跡と今回の滝遺跡が単一時期の遺跡とすると、その広がる範囲は長さ200m近くに及び、有数の遺跡であることは間違いはあるまい。しかも、この遺跡の北方の川崎の台地には、かつて関野克氏、山内清男氏の調査によって判明している古墳時代、和泉期の遺跡がある。未だ実態は明らかでないが、かかる関係を考えても、その持つ意味は重要であらうと思われる。

さて調査は北側の土地境界間を東西方向にA～D区、南北方向に1～7区としてグリッドを設定した。当初A-1、3、5区とC-1、3、5区を調査した際、A-1区にすぐにローム面が確認できず、少し掘り下げた時点で埴形土器の口縁部を検出した。そこで周辺を拡張し、住居址のコーナー部分であることが判明した。

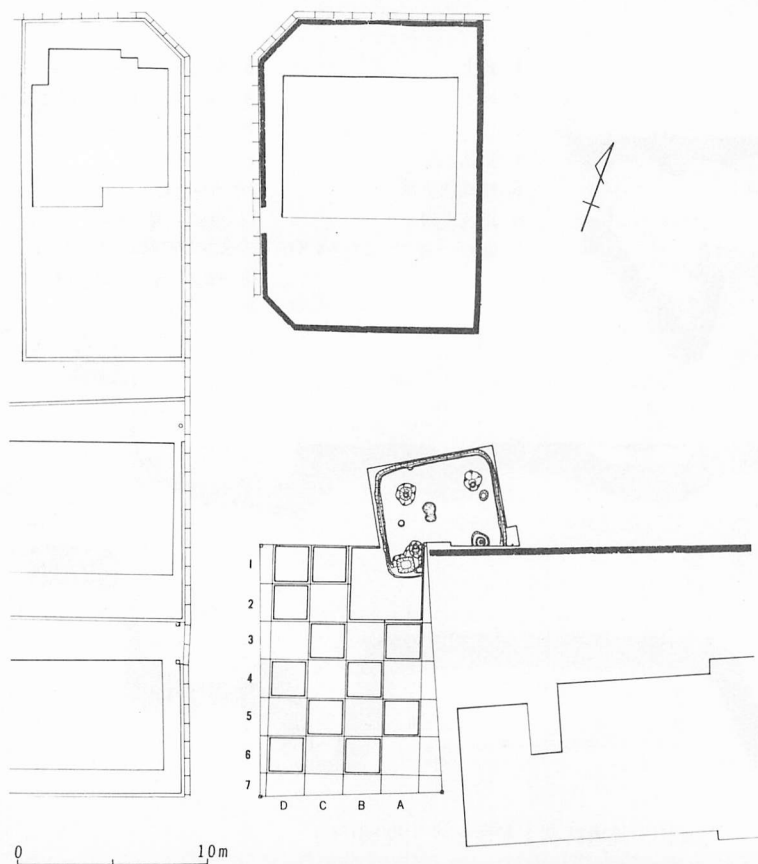
その後、他区グリッドを調査したが遺構は確認されていない。

調査区の範囲内で、住居址のコーナー部分を床面まで掘り下げ、その状態を確かめた。その時点で、土地境界が柱穴址を半裁する形となり、しかも貯蔵穴にあたり、埴形土器や器台形土器を得た。柱穴の状態から判断して、古墳時代初頭の「大形住居」の可能性を得たので、幸い周囲は駐車場と菜園になっており、しかも、午茅等の攪乱が全くないことから、住居の重要性を考え、拡張して調査すべきと判断した。幸い地主吉野公正氏は快く遺跡

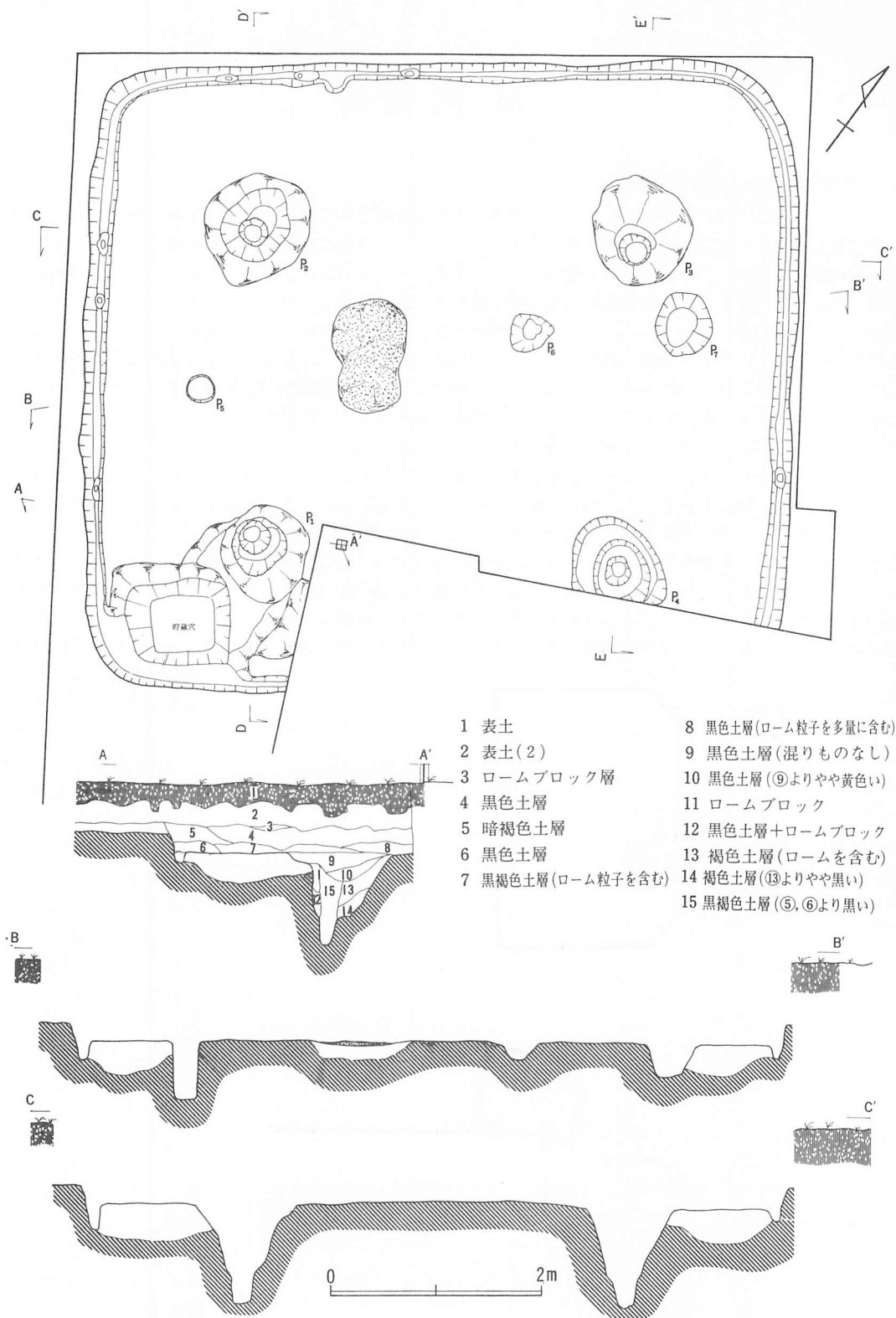
調査に理解を示して下さり、調査の許可を与えて下さった。ここで紙面を借り感謝したい。

以上の経過で、すぐ隣接する垣根に沿って東側へ幅1mのトレンチを入れ、また北側へも同様に幅1mのトレンチを入れて、とりあえず住居址の範囲を確認。幸いなことに他の住居と重複せず、単独の一軒の住居で、大きさは径6.5m前後になる見通しを持つに至った。

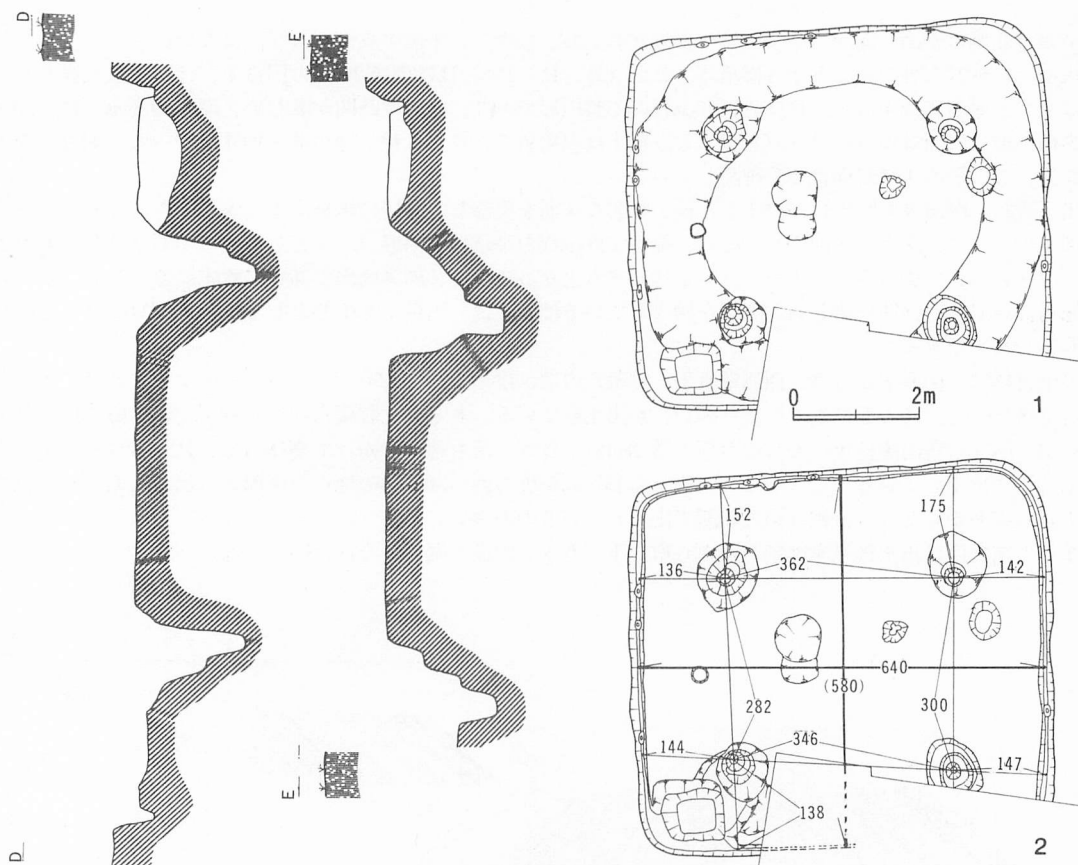
第31図を見てわかる通り、調査区に一部住居がかかり、その住居全体は大きく調査区外にあることになった。したがって、土層図は偶然に柱穴部分にあたった部分のみした計測していない。写真計測図面が終了した後、床面を除去して、床面下の構築の段階を調査して埋め戻し、無事調査を終えた。



第31図



第32図 滝遺跡第1号住居址実測図(1)



第33図 滝遺跡第1号住居址実測図(2)

○第1号住居址 (第32, 33図)

住居址の計測値は第33図2に記した。計測は現地の住居で行ない、住居実測図から確かめるという方法を用いた。計測値は周溝中の幅の中心を用いた。周溝幅が狭いためむしろ壁直下に近い。住居プランの上端、すなわち落ち込み面をもって住居の大きさとするものもあるが、床面積等あるいは壁面の崩壊度によって実際のものとは違ってきたり、不合理になったりするものもあり、十分でないと考えたからである。

プランは隅丸長方形。6.4×5.8 (推定) m。壁面は良好に立ち上がる。四辺はいずれも中央部分では直線に近い。北東コーナーの曲り方からすれば、東側の辺が若干長くなるかも知れない。

周溝は全周する。下幅は4～6 cm位のものである。貯蔵穴と南西コーナー部分の床面は軟弱で、掘り過ぎによって周溝が欠除してしまった可能性がある。また、同様に貯蔵穴とP₁の間もその可能性がある。周溝内の土は黒色土を中心としたもので、床面周辺が軟弱でも区別が出来た。

貯蔵穴は方形で、底面は水平である。深さは床面平均よりもー40cmである。貯蔵穴内の覆土はローム粒子を含む黒色土層で、底面近くでは粘性が強いロームを混じえた黒褐色土層であった。

柱穴は4本 (P₁, P₂, P₃, P₄) が確認された。いずれも径80～100 cmの大きさで穿たれ、底面近くで径35～40 cmになり、さらに一段の段を有し、直径15～20 cmの円形状で、深さ20～25 cmに穿たれている。P₁で、偶然土層断面を確認したのによると(第32図A-A'), 最下底面の小穴の中に柱を立てたものである。中央の黒色土が柱痕であろう。周辺をロームブロックと黒色土の混合土で埋めているのが判る。P₁の落ち込み部分の土層は黒色土で混入物がなく、上部の住居址覆土とは区別がつき、この上は壁直下に廻る第6層黒色土層に相当する。

炉址は円形+円形の瓢箪形を呈し、床面を2～3 cm程に浅く掘られた様相をなす。炉址下は良好に過熱を受けている。北側に寄った円形の方が過熱部分は深く、大きい。

床面は、柱穴に囲まれた範囲は非常に堅緻であり、良好に踏み堅められていた。それ以外では軟弱であったが、

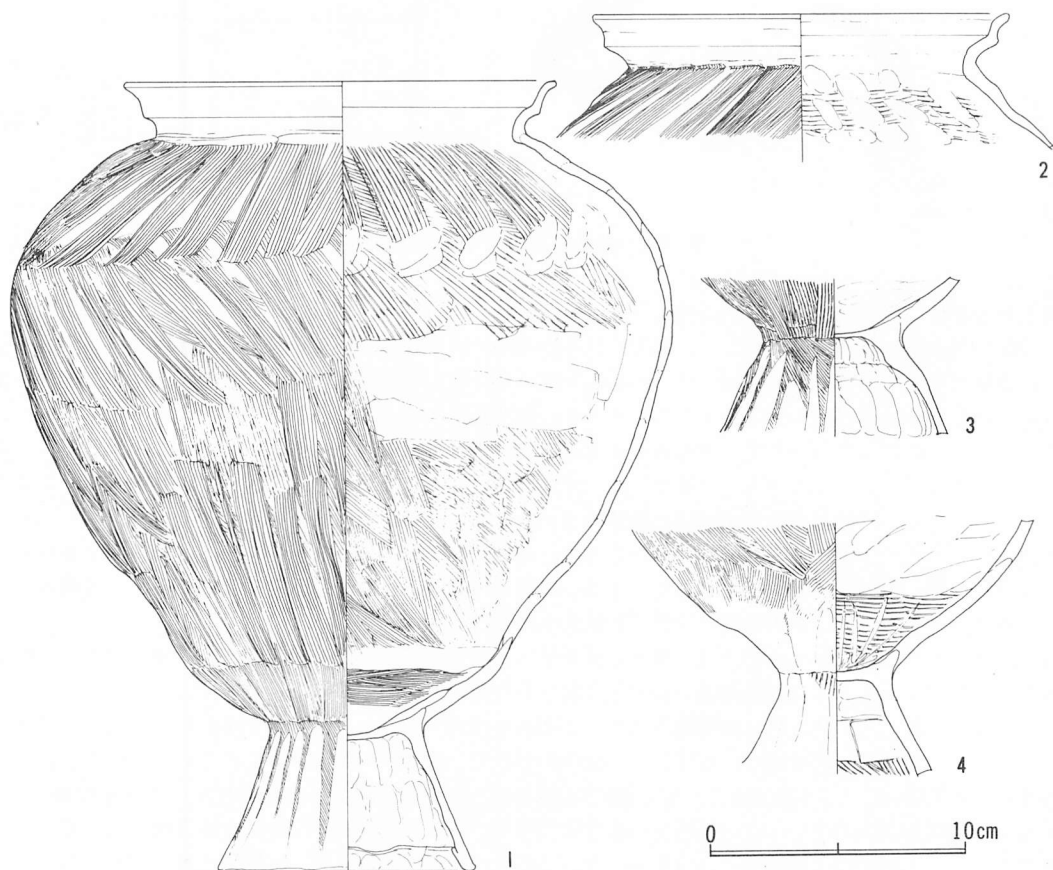
炉址から北側の壁面へ向かってやや堅い部分があった。しかし、床面中央部のようにではない。

床面上に柱穴以外のピットが3個確認された (P_5 , P_6 , P_7)。 P_5 は直径25cmの円形で、ほぼ垂直に穿たれ、底面は水平、深さ55cmを計る。 P_6 は直径40cm程の不整円形であり、底面は凸凹が激しい。深さ約20cm。 P_7 は60×50cmの楕円形、底面はゆるいカーブを呈する。覆土は黒褐色で、ローム粒子等の混入物はなかった。調査上の不手際から、この P_7 の土層断面は十分確認していない。

出土遺物、図面等の図示化が終了した後、軟弱な床面を廃除して住居の構築面まで確認した。それによると第33図1のように、深さは床面より30cm程、幅は120cm程の帯状に、円形プランとして廻ってU字状に掘られていた。すなわち、住居の各コーナーではU字状に立ち上がってきて、周溝底面の高さに水平になっていた。それらの底面はいずれも凸凹が激しい。床面を構成している埋め土は、黒色土を中心としてロームブロックを半分以下に混合した土である。

出土遺物は、床面上からは、西側壁直下と貯蔵穴の間に埴形土器(No.23)、 P_3 と東側コーナーにかけてS字口縁の台付甕(No.1)、 P_2 の西側近くに甕(No.12)が出土している。さらに、貯蔵穴内から壺形土器口縁部破片(No.18)とNo.34、No.35、 P_1 内黒色土中から器台形土器(No.42)、 P_2 から落ち込みにかけて甕(No.15)、 P_3 からは壺形土器胴部(No.19)が出土している。ミニチュア土器(No.45)は炉址の西へ30cm程の地点で床面から出土した。それ以外はいずれも床面から2～5cm程浮いた状態で出土しているが多い。

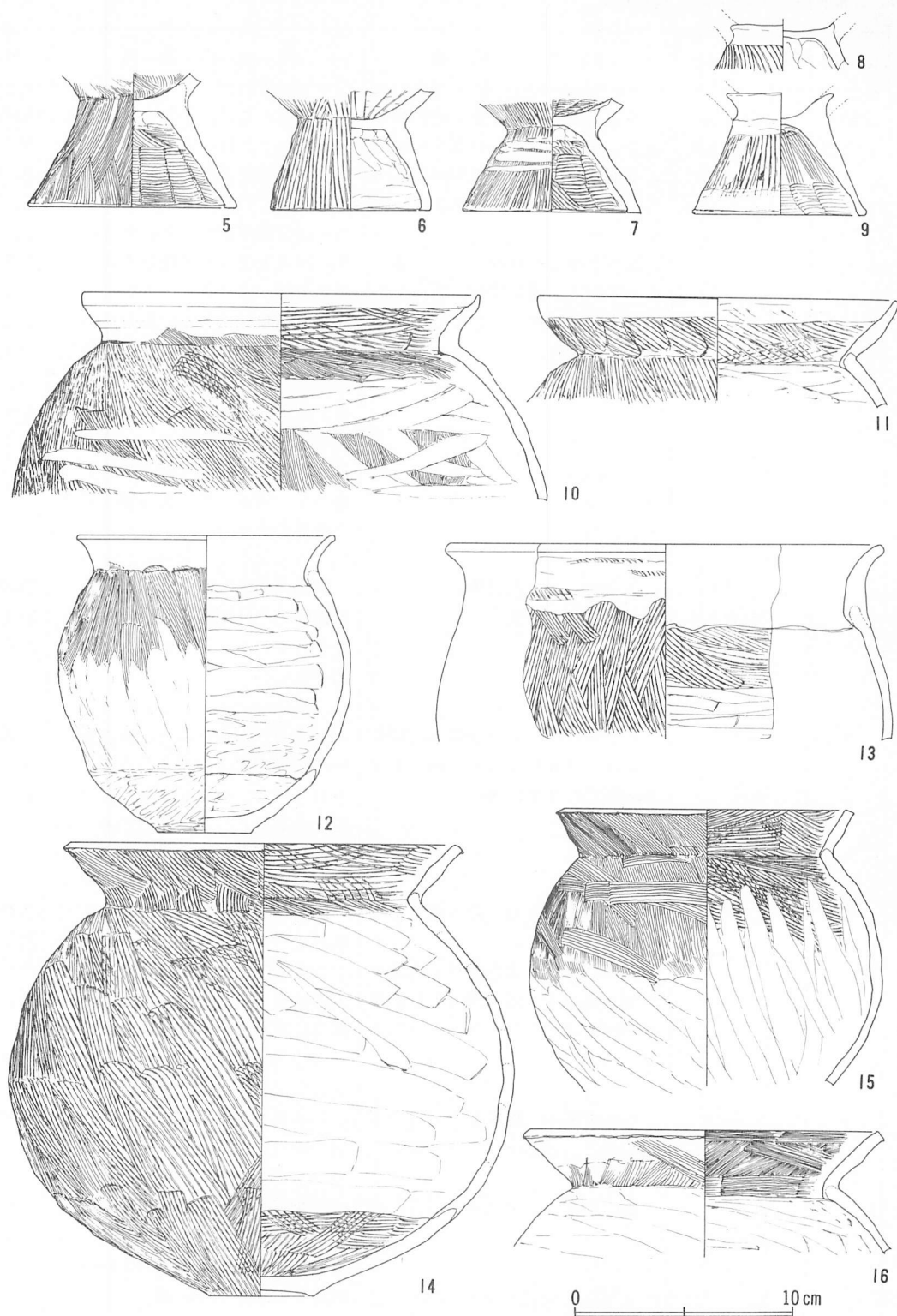
多くの土器片は出土地点を図示しながら取り上げたが、図面の関係で今回は図示しなかった。



第34図 滝遺跡第1号住居址出土土器(1)

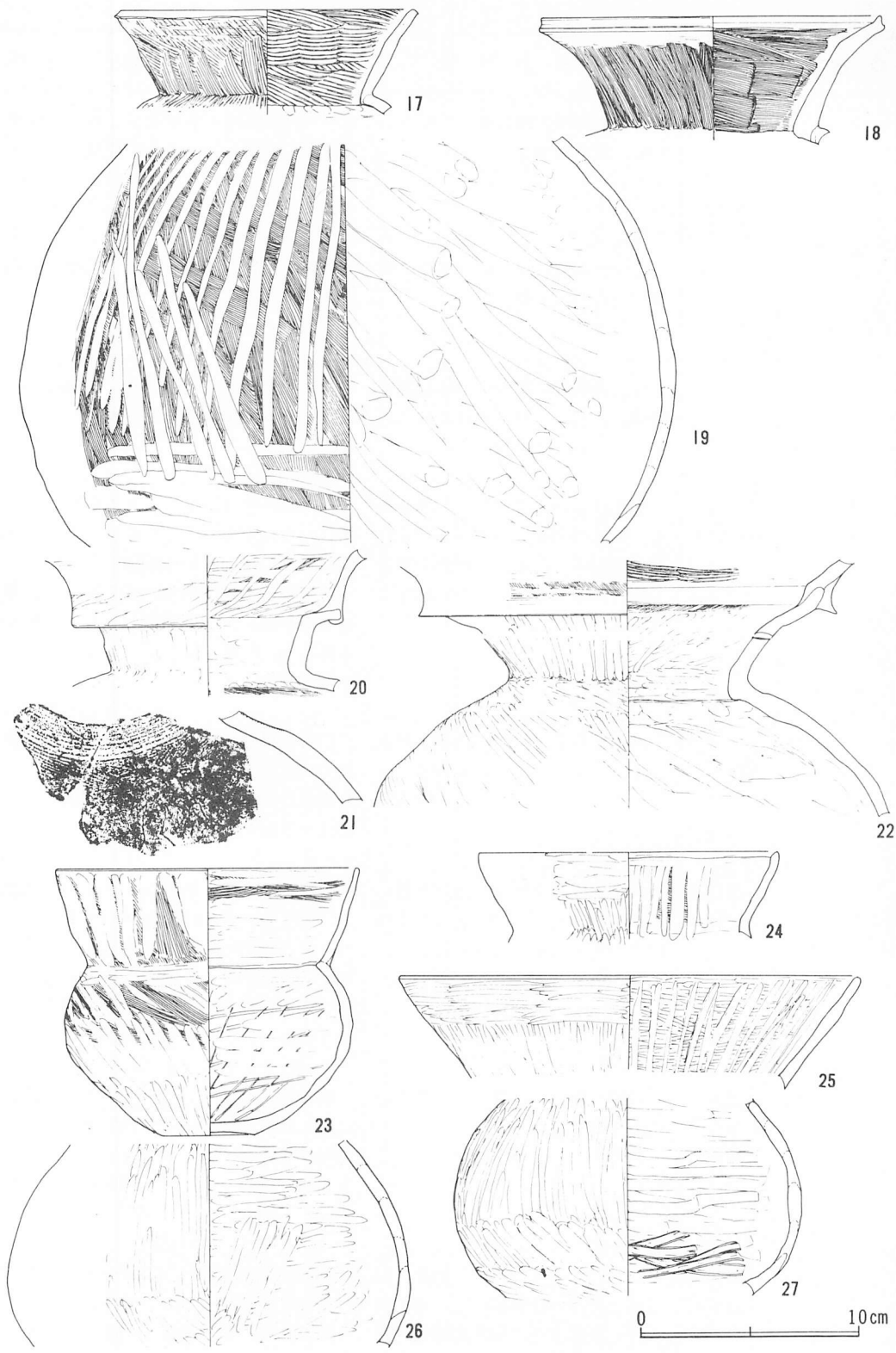
○滝遺跡第1号住居址出土土器

器 種	番号	大きさ(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
土師器 台付甕	1	口径17.3 胴最大径 26.5 器高30.8	S字状口縁の台付甕、破片数が 少く、かろうじて口唇部から脚端 まで連続した。器厚は肩部で3mm 程で脚部接合部から上半部が5mm 程になっている。 脚部下端は折り返えて2重になっ ている。脚の接合、胴下半の 接合方法は図示したとおり、确实 に観察出来た。	内外面ともにハケ目を多用して いるが、ハケ目の巾により、内面 のハケ目は工具が2種類あり胴上 半部はハケの間隔が荒い。下半の ハケは間隔が密になる。外面のハ ケは内面下半よりは間隔があくが ハケ先端はより鋭い。都合ハケ工 具は3種類使用していたと思われ る。脚部ハケ目は斜位に一部施し たのち、縦になでて消去されてい る。胴部内面、脚部内面は指頭に よる押圧の凹凸が激しい。指頭の 押圧によって器肉を薄くするので あろう。内面に胴中央に横位にヘ ラ削りがある。	色調 胴上半部黒褐 色、脚部茶褐 色、内面黒褐 色、外面には 炭化物が付着 している。 胎土に3mm程 の小砂利が入 り、雲母片も 少量含まれて いる。
〃	2	口径16.5 現存1/6 (推定)	S字状口縁の台付甕。 外面にスガが付着	内面は指頭圧痕で凸凹がある。 内面横方向に間隔の荒いハケ目が 施されている。外面のハケ目は間 隔が狭い。	色調 黒褐色 胎土は1と変 わらない。
〃	3		S字状口縁の台付甕脚部。脚部 は器厚が3mm程になる。接合部は 2mm程で、非常に薄い。	脚内面は指頭による圧痕が激し い。胴部内面は指によるなでが施 されている。脚外面のハケ目は斜 位に全面施されたのち等間隔にス リ消しが施される。	色調 茶褐色 胎土は1と同 じ。
〃	4		台付甕 胴下部に緩い段を有す る。 胴部ハケ目は間隔が狭く内面ハ ケ目と異なる。脚の接合部と脚部 にかけてはハケ目を消去させてい る。	内面は胴底部に同心円状に間隔 のあるハケ目。それより上は接合 した後に指でなで上げている。脚 内面は縦方向にハケを施したのち 横位に顕著なヘラ削りを施す。	色調 暗茶色。 胎土に長石等 の小砂利を含 む。
〃	5		台付甕脚部 脚外面ハケ目は 「  」「  」「  」の順序でする特徴有。	ハケ目の間隔は狭い。胴下部も 同一のハケ目。	色調 暗褐色
〃	6		脚の端部は内湾気味	ハケ目工具は間隔が荒い。脚内 面は指頭で押圧し横なでをしてい る。胴部内面はヘラ削り。中心を 固定して同心円状を描く。	色調 黄褐色



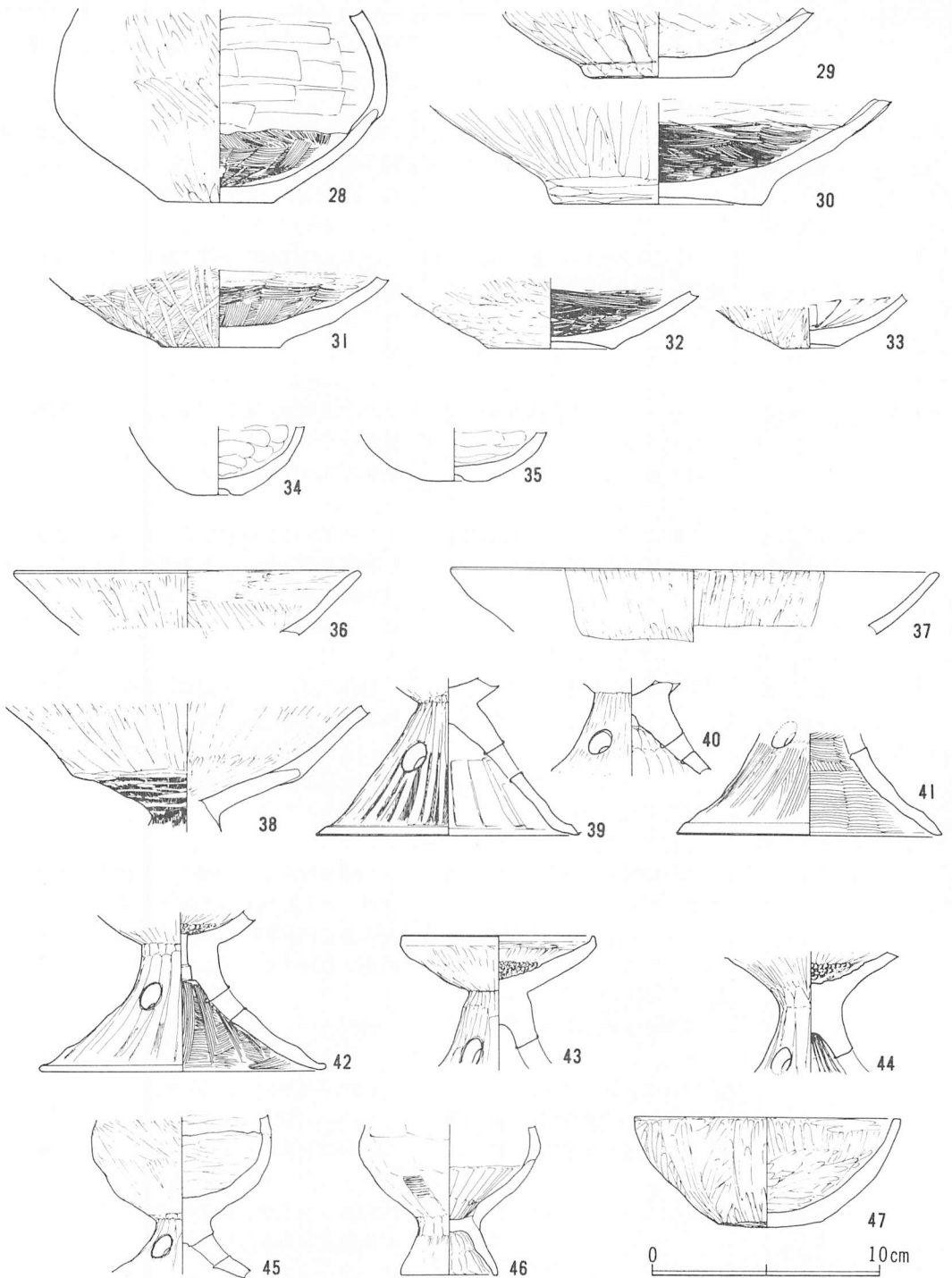
第35図 滝遺跡第1号住居址出土土器(2)

器 種	番号	大きさ(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
〃	7		台付甕脚部。接合痕が外面から明瞭に観察出来る。	ハケ目は脚部内面が荒く、他の胴内面、外面は同一工具で間隔が狭い。脚外面に三条のヘラ磨き痕がある。全周しない。	色調 黒褐色
〃	8		台付甕脚部。接合痕が残る。胴部が接合面で剥離。	胴部へ接合していくために端部をつまみ上げている。ハケ目は間隔が荒い。	色調 黄褐色
〃	9		台付甕脚部。胴部への接合部で剥離したもの。胴部の底部は「U」字状に凹む。4に類似する。	ハケ目は内面、外面ともに間隔が荒い。脚部端は横なでされている。	
土師器 甕	10	口径13.5 現存1/3	胴部は球形になるものと思われる。口唇部先端はつまみ上げられ尖がり気味。口縁部と胴部の接合は強く角をもち、「く」の字状にくびれる。	口縁部外側は横なで。その前段階にハケ目がなで上げられている。外面及び口縁部内面は間隔の荒い同一のハケ工具。胴部内面のハケは間隔が狭く、胴部表面の工具とは異なる。内面に横位に大きくヘラ削りが施される。	色調 暗褐色 外面頸部位に ススが付着。
〃	11	口径16.6 現存1/3	胴部は球形。口唇部は強く押し気味につまみ上げられ尖がる。	口唇部横なでハケ目は消去されている。ハケ目は口縁部内側、外面共に同一工具で荒い。胴部内面はヘラ削り。	色調 黒褐色
〃	12	口径12.0 器高13.6	口頸部は器肉が厚く他の土器に比べてくびれ部は「角」をもたない。口唇部先端は細く丸味を帯る。	口縁部横なで、胴部はハケを施し、胴中位に軽く上→下へヘラ削り、あるいは「なで状」に施して、胴下半は横位にヘラ磨きされている。内面は横にヘラ削り、下半はヘラ磨きを施す。ヘラ磨きは荒い。	色調 黒褐色
〃	13	口径20.4 現存1/6 (推定)	口頸部接合部は厚く、胴部方向へ引き降している。	胴部のハケは「ㄨ」⇄「ㄣ」の交互に施しNo.5の脚に施す方法に似る。口縁部を接合したのち、さらにハケを施し横なでをする。胴内面下半はヘラ削り。	色調 黒褐色
〃	14	口径13.6 器高20.7	口唇部は平坦で斜位に整形。口縁部と胴部の接合は「く」の字に折れる。底部は上げ底状に周辺を角張らせる。恐らく円管状の貼付の	内面ハケは放射に中心から外方へ施し、胴部接合ののち内面はヘラ削り。胴下半は横位、上半は斜め上方へ施す。ハケ工具は全体に	色調 茶褐色



第36図 滝遺跡第1号住居址出土土器(3)

器 種	番号	大きさ(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
土師器 甕	15	口径13.6 現存2/3	ち整形したものか？ 口唇部形態は14に同じ。 外面は下半部に器面剝離している。	同一工具、外面は左上から右下へ施す。 ハケは比較的間隔があき荒い。胴下半外面へラ削り。「上→下」方向 内面は下→上へラ削り。	色調 黒褐色 内面 茶褐色
〃	16		口唇部形態は14、15に同じ。口縁部は「く」の字状に折れる。	ハケ工具は間隔が狭く緻密。胴部内面へラ削り。胴部外面へラ削り。口縁部外面はハケを施した後横など。	色調 茶色
土師器 壺	17	口径14.2 現存1/4	口径が小さく次の和泉期に続く器形であろう。「く」の字状に大きく折れる。	ハケは間隔が荒い。頸部から口唇部へハケを引き上げている。頸部接合部は指頭の押圧が激しい。	色調 茶褐色
〃	18	口径16.0 現存1/5	器形は17に同類。口唇部は斜位にして斜位部分を凹ましている。	ハケ工具は間隔が狭く、緻密。口唇部先端に横などを施す。接合は胴部内面に指頭が激しく、図のようである。	色調 茶褐色
〃	19		胴中央破片。球形になろう。	器肉は薄い。5mm前後で内面は指頭による押圧痕で凹凸が激しく指による雑な「なで」を施す。外面はハケ(間隔が狭い)を施したのちへラ磨きを間隔をあけて施す。	色調 黒褐色
〃	20		二重口縁壺。胴部は球形をなすと思われる。	口縁部外面上半は横などを施す全体にハケ目痕がへラ磨きの間に見える。内面頸部と胴部の接合部内面に指頭圧痕が激しい。	色調 黄白色
〃	21		胴部は球形になると思われる。	頸部直下に条線文様が一周する。	
〃	22		口縁部と胴部は接合しない。外面内面のへラ磨き痕の方向が類似するため同一個体と扱った。	口縁部内外面にはへラ磨き横などで前のハケ整形が一部残されている。胴部外面のへラ磨きは巾5cm程を一ブロックとして施す。胴部内面はへラ削り。頸部接合部内面に指頭痕が著るしい。	色調 茶褐色 肩部に大きな黒斑がある。
土師器 埴	23	口径14.2 器高12.2	口縁部は「く」の字状に折れ、接合方法は胴部に直接乗せる方法で	外面はハケ整形後にへラ磨き。胴部内面は竹管状工具で引き上る	色調 茶褐色 口縁と肩部に



第37図 滝遺跡第1号住居址出土土器(4)

器 種	番号	大きさ(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
土師器 壺		現存1/2	ある。底部は上げ底気味。器厚は薄い。	ように施したのちまばらなへら磨きを施す。	大きな黒斑有り。
	24	口径14.0 現存1/3	口縁は内湾気味で口唇部は斜位に整形されている。	へら磨きは丁寧で、その間に一部ハケ整形痕が見られる。	色調 明茶色
	25	口径21.4	口唇部は丸い。	へら磨きは丁寧。内面は横方向のち放射状に縦に施す。顕著に見られ暗文風。	色調 明茶色
	26		胴下部でやや窄まると思われる	内外面共にへら磨きが顕著。巾3 cm～5 cmを一ブロックにして施す。	色調内面は明茶色外面は暗茶色
	27		やや扁平の球形になろう。	外面へら磨き。内面へら削り。内面底部近くにへら削り工具を反転して施す。	
	28	底径 5.0	胴部下半に輪積接合部に一段の段を有す。	底部胴下半部に第1工程時のハケ整形。ハケ間隔は狭く、底部に一端をおき同心円状に回転させる。胴中央部は接合のちへら削り。	色調 赤茶色
	29	底径 6.5	底部は一段の段を有して胴部へ連続している。	内面底部中心部はへら磨き。その上半へ移行部はへら削りとなっている。	色調 茶褐色
	30	底径 9.5	底部は上底になっている。円環技法によるものか。	内面はハケを同心円状に施す。胴中央部を接合したのちへら削り。	色調 黒褐色
	31	底径 5.4	底部に角を有する段をもち外面へら磨きは最終的なものが、間隔をおいて顕著にみられる。	内面はハケを同心円状に施したのち胴中央部を輪積しへら磨き。ハケは非常に間隔が密。	色調 明茶色
	32	底径 5.8	底部は上底。円環技法によるか。底面は非常に薄い。	ハケは同心円状。ハケは間隔が密。	色調 黒色
	33	底径 2.5	底部は上底。	内面は同心円状にへら削り。	色調 茶色
	34	底径 2.3	底部は中央が明瞭に凹む。円管技法による。	内面は指で横位になでている。	色調黄褐色
	35	底径 2.8	同上。34よりやや大。	同上	色調黄褐色

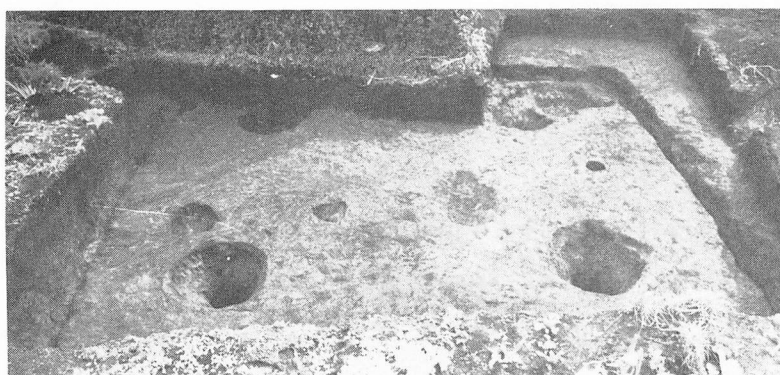
器 種	番号	大きさ(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
土師器 高杯	36	口径15.4	直線的に外湾する。器肉は4mm程で薄い。	全面丁寧なヘラ磨き。	色調 黄肌色
〃	37	口径21.6	口唇部は外側へなめらかに出ている。	内面ヘラ磨きは横位方向の上に放射状に施している。	色調 白茶色
〃	38		杯部は途中で上半部の接合部で厚味を有す。接合面は観察出来た。	脚部は非常に緻密なハケを施す内面は丁寧なヘラ磨き。	色調 暗茶色
〃	39	脚底径11.6	脚中央の穿孔は3ヶ。底面端はつまみ出され、先端は劣がる。	脚部内面はヘラ削り。脚先端は横なで、ハケを残しながらヘラ磨。	色調 明茶色
〃	40		脚中央の穿孔は3ヶ。	脚内面は指頭の痕跡有り。	色調 茶色
〃	41	脚底径11.5	脚中央の穿孔は3ヶ。脚端部は先端が尖がる。	外面ハケは縦。内面は横に同心円状に施す。	色調 暗褐色 胎土良好
土師器 器台	42	脚底径12.8	脚中央の穿孔は3ヶ。脚端部はつまみ出され細く丸味をもつ。受け部から脚への穿孔は中途に段をもつ。下の方の孔が大きい。受け部内面に「小さな凸凹の集合」有。	外面は間隔の狭いハケの後縦にヘラ磨き。脚端部は横なで。内面は同心円状にハケを施した後、間隔をもって放射状に施す。	色調 明茶褐色
〃	43	口縁径8.6	口唇部は小さく立ち上る。受け部内面に「小さな凸凹の集合」有脚の穿孔は3ヶ。	外面、内面のヘラ磨きは丁寧。脚部内面は指なで。	色調 茶色
〃	44		受け部内面に42、43と同様の凸凹有。穿孔3ヶ。	脚内面は同心円状にヘラ削り。	色調 茶褐色
土師器 台付埴	45		脚穿孔は3ヶ。	内・外面ともにヘラ磨き、脚内面は指なで。	色調 茶色
土師器 模造台 付 甕	46		全体の成形一輪積み一脚部十胴中位十胴上部は、普通のものと変りがない。	外面は一部ハケ整形が残るが、全体にヘラ磨き。光沢を及ぶる。 内面は底部にそって同心円状のヘラ削り。脚内面に指頭痕。	色調 茶色
土師器 埴	47		口唇部は水平に切られたように整形される。	ヘラ磨き痕は顕著で、ヘラ磨面は陵が著るしい。	色調 明茶色

PL7

滝遺跡第1号住居



(西より)

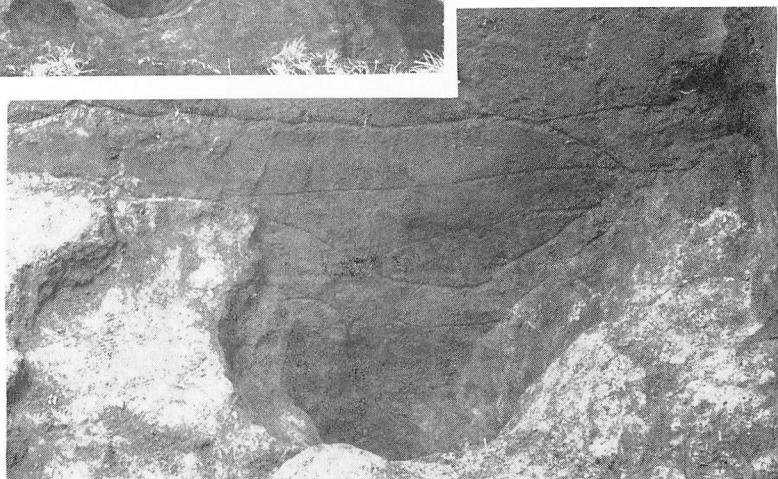


(北より)

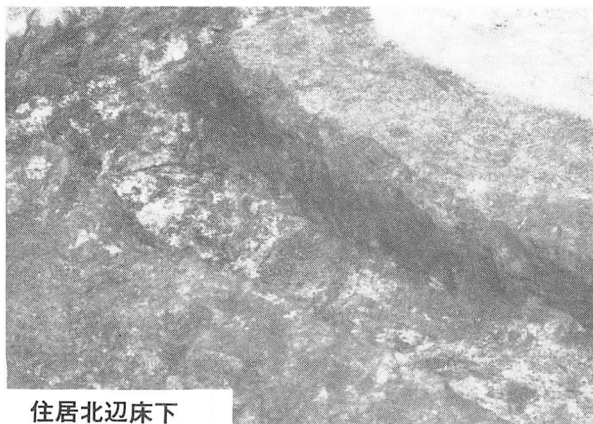


(東より)

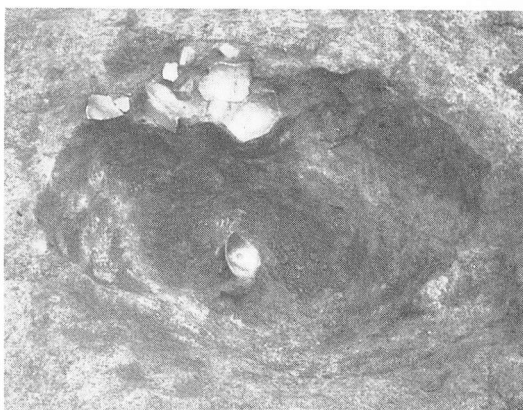
柱穴 (P1) 断面



PL 8



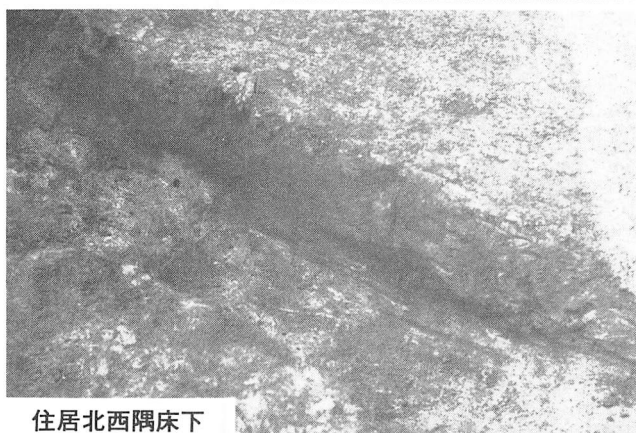
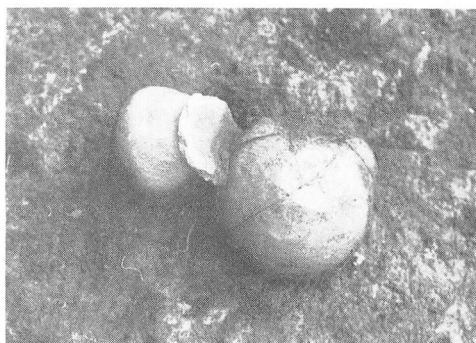
住居北辺床下



住居柱穴3出土状態



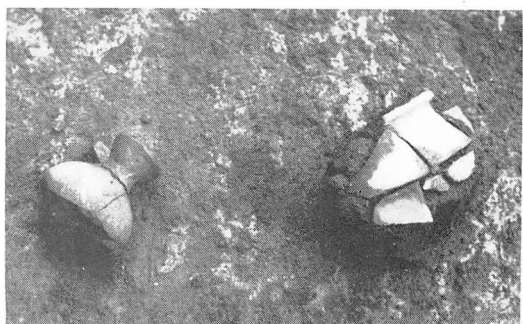
住居北東隅床下

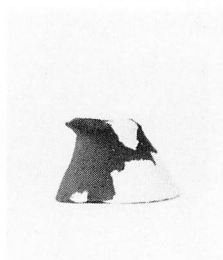


住居北西隅床下



S字口縁台付甕出土状態





1

5

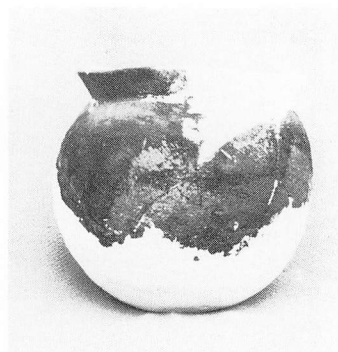
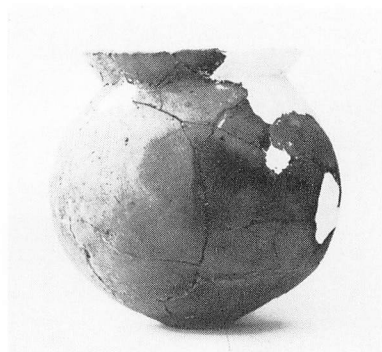
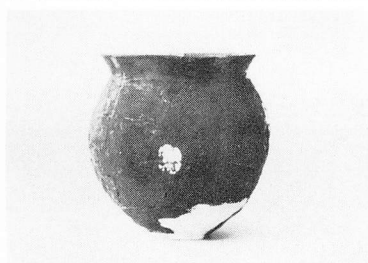
6

7

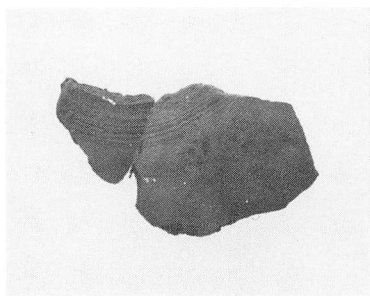
12

14

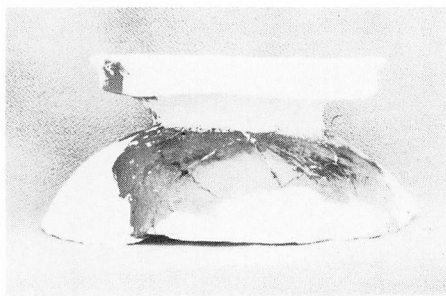
15



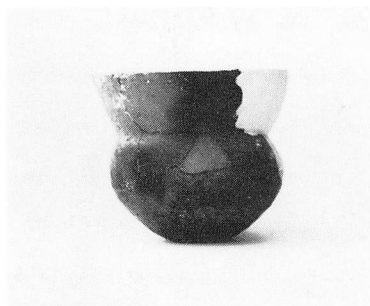
21



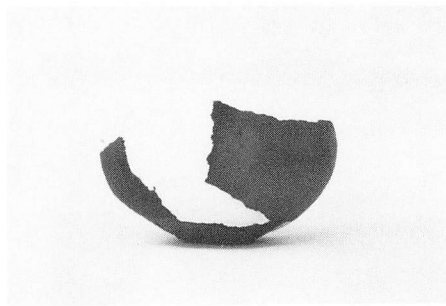
22



23



28

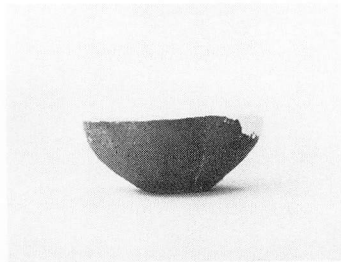
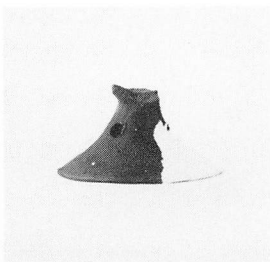


39

42

46

47



II 考古

られる。7は下端を欠損するが、穿孔と擦り込みをもつ滑石製の垂飾品で、緑色を帯びる。

滝遺跡丸橋地区第2次

土坑1（第6-9図）

長軸80cm、短軸40cm、深

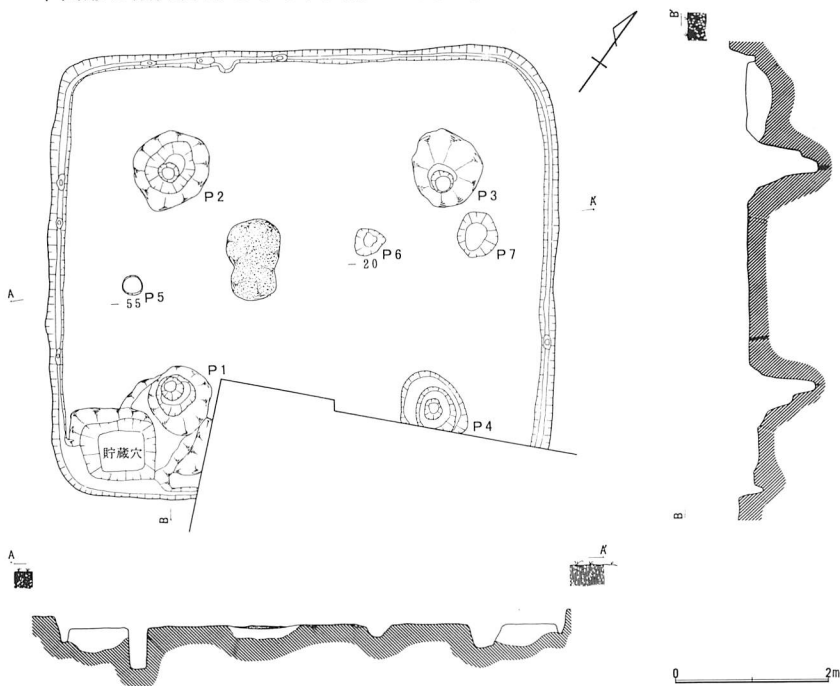
さ20cmほどの平面が長方形

をなす土坑で、覆土の上層

から土師器一個体分が出土している。前期五領式の小型器台で、裏面に刷毛目を残す脚部に円窓を3か所あけ、器面に赤彩を施してある（文献37）。

滝遺跡第1次1号住居跡（第6-10図）

平面形は隅丸方形をなし、周溝が全周し、支柱穴は4本（P1～P4）で深



第6-10図 滝遺跡第1次1号住居跡〈1/100〉

さ20～25cmに及び段をもつ。中央西寄りに双円状になる地床炉が認められ、北側のそれの方が被熱部分が厚い。また、南隅に設けられた貯蔵穴は深さ40cmの平坦な底面を有する。なお、P5は55cm、P6は20cmの深さ（文献37）。

出土の土師器（第6－11図）は前期の五領式（4世紀前半）に属する。刷毛目やヘラ削り、ヘラ磨き、指頭圧痕などによる器面調整がみられる。1～4は台付甕でS字状口縁をもつ。5～8は甕である。9～11・13は壺で、うち10は頸部に条線文が一周し、11は複合口縁を有する。12は^{かん}埴。14・15は高坏、16・17は器台、18は台付埴でいずれも脚穿孔は3穴。19は台付甕のミニチュア、20は碗。

滝遺跡第2次2号住居跡（第6－13図）

平面形は正方形をなし、4本主柱（深さ25・32・28cmの3本＋1）の配置をとるとみられ、周溝が巡る。ただ、東壁の一部が張り出し、直下に深さ25cmの方形ピットを伴う。北壁に両袖を粘土のみで構築したカマドを付設し、その右脇に深さ45cmの方形の貯蔵穴を具える。その下部を柱穴内にも残した柱の炭化材や多量の焼土が覆土下層に遺存していたことから、火災住居と認められる（文献38）。

出土土器（第6－14図）は後期の鬼高式（7世紀前半）に属し、土師器のほか須恵器1点を含む。1～6は長甕、7は壺、8は鉢である。9～13は坏で、口縁部外側と内面全体に赤彩がみられる。14は須恵器蓋で、外面に自然釉がかかっている。

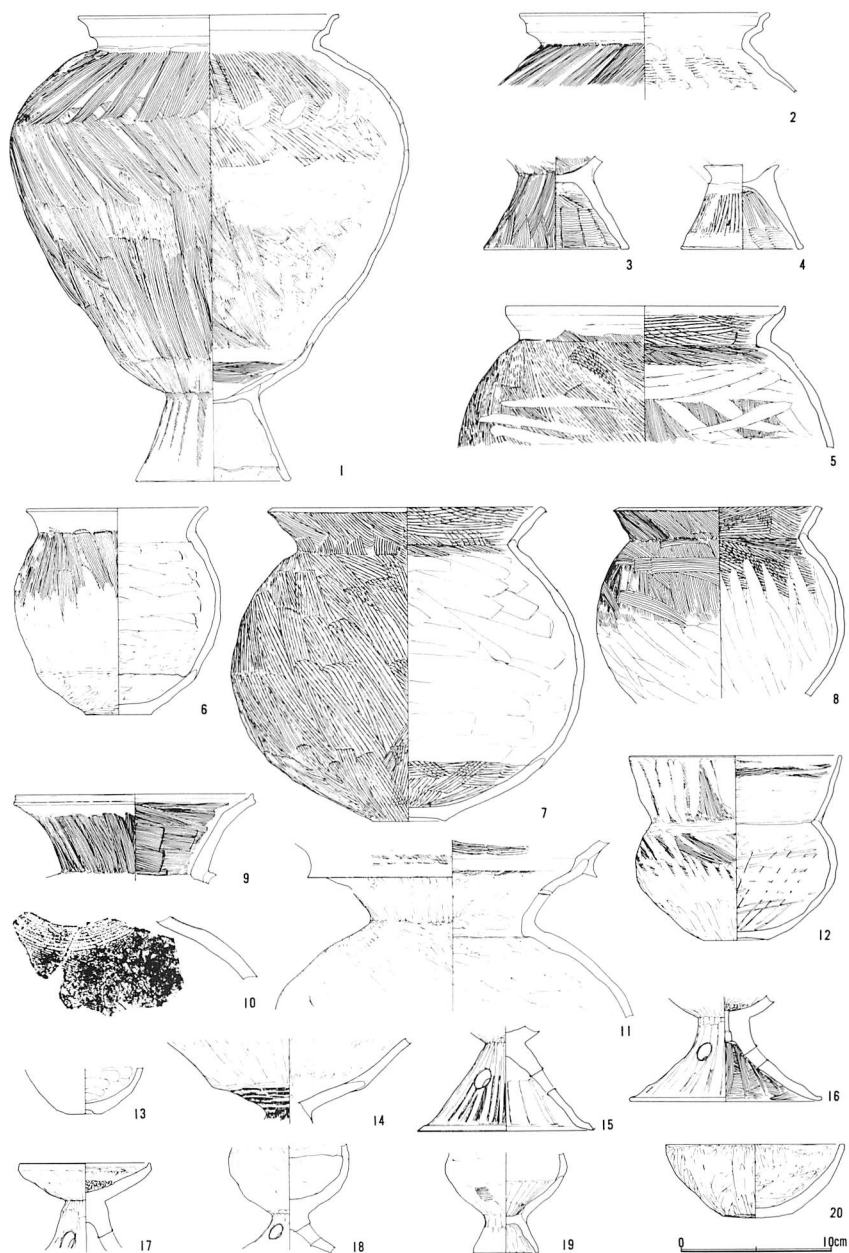
滝遺跡第8次9号住居跡（第6－15図）

後期の10号住に一部切られているが、平面形は隅丸方形をなすとみられ、周溝が巡る。西壁の両隅にある2本（深さ35・38cm）が主柱穴の一翼となろう。地床炉（F1）はやや西壁寄りに位置し、近くに薄く小さい焼土面（F2～3）がのこる。甕の胴部片やS字状口縁の台付甕片など前期の五領式とみられる土師器の小片が出土した（文献44）。

滝遺跡第8次10号住居跡（第6－15図）

前期の9号住を一部切り、また平安時代の土坑3や後世の井戸が重複している。平面形は正方形に近く、周溝が巡り、整った4本主柱穴（P1～P4）の配置をみる。北東壁に付設されたカマドは、地山を削り残した両袖を具え、

Ⅱ 考 古



第6-11图 滝遺跡第1次1号住居跡出土土器〈1/5〉